カナダ・フレーザー川における日本人漁業者の漁場利用

――日記と視察報告書から――

The Fisheries Usage of the Japanese Fishermen in the Fraser River Basin in Canada
―From the Research of Diaries and Inspection Reports―

河原 典史

KAWAHARA Norifumi

要　　旨

本稿では日記類と視察報告書から、カナダ日本人漁業者に関する漁場利用を考察する。その際に、特にカナダ西岸のフレーザー川流域のサケ刺網漁業、およびキャナリー（サケ缶詰工場）での作業工程について報告する。

和歌山県東牟婁郡古田出身の前川佐一郎（1915～2005 年）が実父・勘蔵（1882～1978 年）の渡加や、その後の様子を記した手記を精読すると、当時のサケ刺網漁業に関する漁場利用が読みとれる。これにより、漁船は無動力であり、漁場まで動力船に牽引されていた様子や、日本人漁業者の役割分担がわかる。また、英語を理解する先住者は動力船を付与され、無動力船で漁獲されたサケの収穫を任されていた。

生物学者であり、後に政界へ転進した山本宣治（1889～1929 年）は、青年期のカナダ滞在時に日記を書き綴っている。1909 年 7 月 1 日～ 8 月 25 日までスティーブストンでサケ刺網業に従事した彼の日記には、後の生物学者の片鱗を窺わせるような漁場利用についての的確な記述がある。特に 8 月の漁繁期には、未明の午前 3 時頃から深夜 12 時頃まで刺網漁業が行われていたことは、サケ缶詰産業の季節的、かつ集約的な労働状況を示すものである。

1882 年に設立された大日本水産会は、同年に『大日本水産会報』を創刊し、1916 年に『水産界』と改称した。この会誌に発表された宮田彌治郎の報告書からは、20 世紀初頭のカナダにおけるサケ缶詰工場の様子が詳述されている。

【キーワード】　日系漁民、漁場利用、日記、報告書、山本宣治

１．はじめに

第二次世界大戦前におけるカナダ日本人漁業者の活動については、さまざまな点が明らかになりつつある。しかし漁場利用については、資料の制約から、いまだ不明な点が多い。この課題を明らかにできる資料として、体験者の日記があげられる。和歌山県串本町の個人宅には、当時のカナダ日本人移民に関する古写真、手紙やメモ類の他、さまざまな機関が発行した賞状や書類など約 630

写真１　『無名の勇士』の著者である
前川佐一郎　『前川家コレクション』より

点の資料が保存されている。これまで筆者は、これらの『前川家コレクション』(1) を整理し、研究に活用してきた。特に、前川佐一郎（1915～2005 年）が実父・勘蔵（1882～1978 年）の渡加やその後の様子を記した手記『無名の勇士』（2000 年）を精読すると、当時のサケ刺網漁業に関する漁場利用が読みとれる。

生物学者であり、後に政界へ転進した山本宣治（1889～1929）(2) は、青年期のカナダ滞在時に日記を書き綴っている。この、通称「山宣日記」(3) によれば、1907（明治 40）年から約 2 年間、ハウスボーイやガーディナーなどに就いた後、山宣は 1909 年 7 月 1 日～ 8 月 25 日までスティーブストンでサケ刺網業に従事した。日記には、後の生物学者の片鱗を窺わせるような、漁場利用についての的確な記述がある。

また、これらの日記類と同様、専門的な技術者が記した報告書から学ぶことも多い。大日本水産会から発行された『大日本水産会報』や『水産界』などの報告書には、カナダを視察した技術専門員による漁場利用の説明や、漁具の図解なども掲載されている。

そこで本稿では、これまでカナダ日本人漁業史研究において看過されてきた日記類と視察報告書から、日本人漁業者に関する漁場利用を考察する。特に、カナダ西岸のフレーザー川流域のサケ刺網漁業、およびキャナリー（サケ缶詰工場）での作業工程について紹介しよう。

２．サケ刺網漁業に就くこと―『無名の勇士』から―

1882（明治 15）年に和歌山県東牟婁郡古田（現在の串本町）に生まれた前川勘蔵は、1899（明治 32）年にカナダへ渡った。彼は、フレーザー川河口の中州にあたるルル島の牧場で働いた。ここで 1 年半ほど働いた勘蔵は、河口に位置するスティーブストンのスター・キャナリーへ移った。出身地では伐木業に関わっていた彼は、これまで漁業に携わったことはなかった。その直後の様子は、『無名の勇士』に以下のように記されている（原文のママ）。

> ここには網をつんだ無数の小舟がつながれてあつた。主人は一つの小舟に指をさして「これが君の舟だ」と云つて、次に漁夫達が網を修理してゐる所につれて行つた。二十人余りの日本人が、忙しそうに網仕事にたづさはつてゐた。主人は「あれは皆日本人だ。交って友達になれ」と云つて去つた。

つまり、キャナリーは杭上家屋としてフレーザー川岸に建てられており、そこに日本人が借用している漁船が繋留されていた。漁船には刺網が積みこまれ、漁獲されたサケはキャナリーに運ばれ、缶詰に加工されたのである。また、手記には次の記述もある。

> 小舟にはモーターは入つてゐなかつた。カイをこいだのである。漁場まで行くには、二〇艘位の小舟が、モーターの入った親船に引つぱつてもらふのである。漁場まで行くと、親船からはなされて、各自が思ふままに網を流して鮭のかゝるのを待つた。一日中場所を替えながら、網を入れたり上げた

りするのである。鮭はかゝつたが、仲々えらい仕事であった。天候の好い日はさほどでもなかつたが、雨の日風の日はたまらなかつた。

これには、漁船は無動力であり、漁場まで動力船に牽引されていた様子が記されている。手記からは、日本人漁業者の役割分担もわかる。

主人のガス・ミラードは、勘蔵が英語が少しわかるので、日本人漁夫たちに何か用事がある毎に、彼に想談に来た。そうしてゐる内に、一九〇三年に勘蔵は十八形のモーターの入つた船をあたえられて、漁夫達の取った鮭を集めて廻る役目をもらつた。大きな昇進であつた。

つまり、勘蔵のように英語を理解する先住者は動力船を付与され、無動力船で漁獲されたサケの収穫を任されたのである。

その後、新しい漁場の発見によって、スティーブストンからバンクーバー島西岸のユークレットに移住した勘蔵は、そこで日本人漁業組合の組織を提案し、1924（大正 13）年に創立されたユークレット日系漁業組合の初代会長に就任した。カナダ資本から独立し、新しい流通販路を探求したこの日系漁業組合の活動は、カナダ漁業史において特筆されるべき史実である[4]。これらの索引者であった前川父子の活躍を描いた『無名の勇士』をはじめ、日記類や古写真などからなる『前川家コレクション』は、当時の漁場利用を解明する貴重な史料である[5]。

３．サケを獲ること―『山宣日記』と報告書から―

１）地理的な記述

これまで『山宣日記』からは、山宣のキリスト教への感化、性教育の試行や政治家としての活躍や苦悶などが読解されてきた[6]。しかし、後に生物学者となる彼の観察眼は極めて鋭いにも関わらず、そこからカナダ日本人移民の生業については解読されてこなかった。

それではスティーブストンの地域性について、1909 年の『山宣日記』から紹介してもらおう（下線は筆者）。

フレザー河は太平洋沿岸ではコロンビアに次ぐ大河で、源はロッキー及びセルカーク山脈の氷河に発し流れ流れて五百哩遂に大陸と晩香坡島に挟まれたジョルジャ湾に注ぐ。水清洌底を見る程といひたいが左様はいかぬ。氷河の末流れてくるのだから恰もミルクの様な色で随分冷つこい。水量も多いから此村から十哩位出ても白濁りに海がなつている。余り広くないジョルジャ湾は数百年後には此河の吐く砂の為に埋められて広い牧場にならうもしれぬ。（1909 年 7 月 12 日）

この記述は、氷食作用によるフレーザー川による微小な砂・泥の運搬作用と、河口での堆積作用が活発な様子を描写している。

東、後を振返れば一面の海岸キャナリーの建物も櫛比（しつび）〈くしの歯のようにならぶ〉し、松原見え茫々数十里の向ふに巍然、例のタコマ富士ベーカー山が一万三千呎純白の姿を以てフレザーの平野を圧している。（7 月 12 日）

フレーザー川によって形成された三角州にキャナリーが連立している景観を、山宣は「櫛比」と比喩している点は興味深い。それほど、多くのキャナリーが操業していたのである。

> フレザーの河口はほぼ三つに分れ、真中のが最広くて此捨伏頓（ステブストン）の所で凡そ一哩もあらう、此所から下は茫々たる海だ。干潮には六哩余の沖まで州が現はれて其端に灯台がある。其から州の間々の水路は浮標で示してあつて此捨伏頓から尚十数哩の川上まで四、五千噸の船が登つて来られる。其真中の大きな川の両側上下二哩ばかりは数十の罐詰製造所（キャナリー）がたて列んで、その間々に憐寸箱の様な漁師の家や船をもやふ桟橋や杭で塞つてる。
>
> （7月13日：花やしき宛書簡）

ここからは、フレーザー川沿いに建つ杭上家屋のキャナリーの隙間に、日本人漁業者の住む住居が建ち並んでいたことがわかる。

> チャンと準備が整ふてからは朝夕海ばたに腰打かけて紀州の漁師連の「がいにええひより、沖へいきやんすら」とかやつてるのを聴いたり　（7月13日・書簡）

> 暇にはペンペン三味線に合せてサノサ節を怒鳴る蛮声も、至る所で「ゆこら、ゆこら」といふ紀州語は中々勢力がある。　（7月13日：花やしき宛書簡）

そして、スティーブストンでは和歌山県出身者が極めて多かったことが示されている。つまり、1888（明治21）年に三尾出身の工野儀兵衛が渡加し、その後の連鎖移住の結果を[7]、山宣は日記に記しているのである。

> 昨年の二月撮影した「五人ハイカラ」の面々一人内片のみ遠く三百哩北方スキナ河に走つて鮭をとらんとし、あと四人悉く此地にきたり、皆同じキャナリーに属し、住むも同じ所に住ひ活動中。
>
> （7月13日）

この箇所では、フレーザー川河口のスティーブストンだけでなく、スキーナー川やナース川などの大河の河口にキャナリーが立地し、それらへも日本人が従事しに行くことを示している。このように、当時のカナダ西岸のキャナリーでは、日本人の労働力が各地で求められていたのである。

2）出漁前後の記述

沖合の海上での漁撈に比べて、産卵のため河川に遡上してくるサケ類を刺網で漁獲することは、簡単だったのかもしれない。山宣は、次のような大胆な記述を残している。

> 漁する場所はフレザー河口の周囲で波風といふ様な大袈裟なものはなし、万一変事があつても二千の漁船が塊つて居る其中の事、体力からいふても十五、六の子供でもやつてる仕事でもあり、十年此年十三、四歳の時にきてそれから小学校に入りてスクールボーイしながら毎年鮭とつて小遣を作り。
>
> （7月13日：花やしき宛書簡）

つまり、フレーザー川でのサケ刺網漁業は、海岸に連立するキャナリーへすぐにサケが水揚げさ

れるため、子供や日本からの出稼者でも可能な低次な漁撈であったと読解できるかもしれない。ところが、漁撈以外に次のような出漁準備や帰港後の後片付けなどをみると、必ずしも「15、6（歳）の子供でも」できるような簡単な仕事ではないことがわかる。

ひるまへ我等の船へ大網積込み、前のは上げ愈々支度整ふ。あか汲出すなど雑務
（7月10日）

六時起床、米其他を船に積込み、干潮か内に上へ廻し大網あげ毒液に浸し、小さき方を亦船へ積込む。
（7月17日）

七時起床、皆網積み方に忙しく互に助け、十一時漸くしまふ。（7月18日）

このような諸作業もあり、それらは6～7月の漁期初旬ではともかく、8～9月の最盛期には極めて多忙となる。『山宣日記』の記述からさまざまな作業を抽出し、それを1日のスケジュールにまとめると次のようになる（表1）。

漁期初旬では、午前中に漁業者は雑用に終始し、およそ正午に出漁する。それに対し最盛期になると、彼らは未明の午前3時に起床し、5時に出漁する。北緯50度付近に位置するスティーブストンでは、夏季にはこの頃に夜明けを迎えるため、彼らはそれと同時に出漁するのである。さらに、日記には夕食の記述しかないが、食料品なども漁船に積み込むことから、朝食と昼食も船上で取るのであろう。

高緯度にあるスティーブストンでは、午後9時ころに日没を迎える。そのころ彼らは仮眠をとり、さらに深夜まで漁撈は続けられる。そして、帰港後に漁網の洗浄、修理や乾燥を行なった後、漁業者は床に就く。つまり、カナダ西岸のサケ刺網漁業では、技能よりも体力に依るところが大きかったのである。まだ体力のない10代前半の子供では「小遣」稼ぎにはなっても、最盛期に一人前の仕事をこなすことは困難であったに違いない。

表1　『山宣日記』にみるスティーブストンでのサケ漁業者の1日

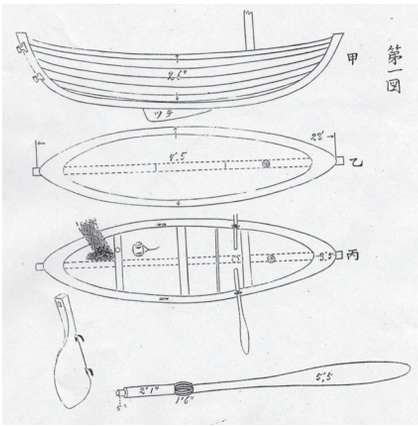
	7月（漁期初旬）	8月（漁期最盛期）
AM 3		起床
4		
5		出漁
6	起床	網を入れるのに約3分
7		
8	魚網を硫酸銅水へ浸す	
9	アカの汲み出し	
10	魚網、食料品などの積み込み	
11		
12	出漁	
PM 1	網入れ	
2		
3		
4	帰港	
5		満潮時に網入れ後、夕食
6		
7		
8		
9		
10		仮眠
11		
12		帰港
		網洗い・修理・干し後、就寝

：漁撈活動
参考文献（3）より作成

3）漁場の記述

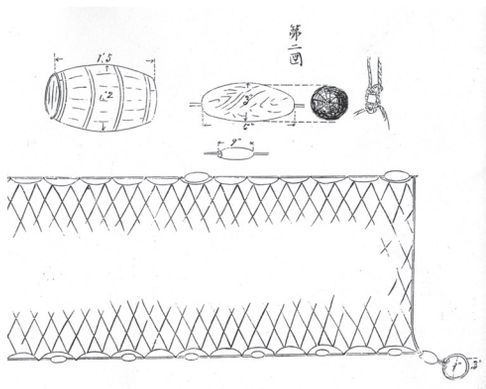
次に具体的な漁場利用について、日記から読み解いてみよう。

図２　サケ刺網漁業の漁船



「フレザー河鮭漁業及鮭缶詰業に関する取調書」『大日本水産会報』237、1902 より

図３　サケ刺網漁業の漁具



「フレザー河鮭漁業及鮭缶詰業に関する取調書」『大日本水産会報』237、1902 より

船に乗る二人の一人はネットマンといふ舵を掌り、水縄を持つ、網を投込み上げて魚を外づす役で、先づ船長。一人はプルマン或はパートナーで帆の上げ下ろし、網を下ろすときはオールを漕ぐ、暇には飯を焚く役なのです。

二人同じ権利の組合もあれば、大概はネットマンが網を所有し其他船具まで備へ、プルマンは只労力のみを備へて漁獲高は七分三分乃至七分五厘対二分五厘の配当といふのが例で、大概はさういふ風で、自分のもパートナーとしてで手元は一文も入れず、割合は少なくても実入りがよいといふのです。

（７月 12 日）

これらの記述からは、一隻毎に船長にあたるネットマンと、それを補佐するプルマン（パートナー）の２人が乗船していたことがわかる。漁船の様子は、図２をみれば理解できよう。ただし、両者の取分は均等ではなく、前者と後者の割合はおよそ７：３であったようである。また、前者の搾取もうかがわせる。

それでは、具体的な漁場利用をみると次のような記述がある。

潮上り来りたれば船を出して帆走す、向ひのキャナリーに向け、それより沖の燈台むけて三、四哩走す。

（７月 12 日）

つまり、上潮時に遡上するサケを対象として漁業者は出漁し、無動力船ゆえに潮流や潮汐と出漁のタイミングを計っていたのである。彼らが使用していた漁網は、スコットランドやアイルランド製であり、これは報告書に図示されている（図３）。

４）漁獲の記述

ここでは山宣の活動が、その日記ではどのように描写されたのか説明しよう。

今午後団体に再び総会あり、白人漁者の交渉に接し八月初週尚二仙五厘の増額を要求し、いれらるるまで出漁せずと決議せし由。

（７月 11 日）

今夜から勘定して二十五日まで正味十八日まだある。来月こそ、鮭群の襲来のあるべしと待かまへてる。我々は二週間に百七十尾を獲つたが、来月中に三千以上なければとても勘定に合はぬ。何といふてもあと三週の辛抱、ウンととらねばならぬ。（8月1日・花やしき書簡）

一週間通じて六時間しか寝ずに夜露に打たれて海上に居て、或時は帆にはね飛されて海へはまりかけたり、網の端を五千噸の大汽船に引懸けられ二町も引張られて目を白黒さしたり、色々な面白い目をして正味六週間働いた結果、鮭二千八百余尾の代金三百四十何弗、自分の割前が三割百四弗何仙から、食料（一日）二十七仙、十六弗余、クック料五弗、団体費三弗、人頭税三弗、其他買物を減じ正味七十二弗何某、貴とい命までかけて得たのに七十二弗は一ヶ月の食費とし十弗を別にし、晩市寄宿舎の借り五、六弗、地所払込金三十弗、此村教会献堂式寄附五弗、残りは久保君の入院費に流用してカンカラカン、借金せぬだけが幸福といふ始末。（中略）漁業は我らのなすべきものにあらず（後略）（9月14日・花やしき書簡）

このように睡眠時間もままならない体力勝負のサケ刺網業に、山宣は「命をかけ」るほどではないと判断したのである。彼の漁獲数と拙稿で紹介したアランデール・キャナリーに属する日本人漁業者の漁獲量[8]を比べると、彼の奮闘に考えさせられるのである。

4．サケ缶詰を作ること―視察報告書から―

1882（明治15）年に設立された大日本水産会は、同年に『大日本水産会報』を創刊した。1916（大正5）年に『水産界』と改称されたこの会誌には、日本国内だけでなく海外の水産業の視察報告が数多く掲載されてきた。1920年（大正9）年に発表された宮田彌治郎「北米太平洋沿岸鮭缶詰業の趨勢（1）～（3）」[9]には、20世紀初頭のアメリカとカナダにおけるサケ缶詰工場の様子が詳述されている。特に第3報には、行政文書だけでは判明できない日本人を含めた漁業者の生業が読みとれる。これまでの日本人漁業移民史研究で看過されてきた水産報告書の精査は、極めて重要である。

残念ながら、宮田が視察したサケ缶詰工場名は記されていないものの、これらには、アメリカ北部からカナダにおける一般的なキャナリーと、そこでの雇用者の活動が概説されている。それによれば、漁獲されたサケは集魚船で回収され、そこには船長と機械工が各1名のほか、8名の漁夫が乗船していた。そして、長時間におよぶ作業のため、コックも同乗していたようである。これらの描写は、先述した前川と山宣の記録からは判読できなかった。

漁獲されたサケを缶詰加工する諸作業には、サケの選別から完成品のラベル貼付までの工程に63名が携わっていた（表2）。最も多数で担う作業は、倉庫内での雑役であった。それは完成した缶詰を一つずつ棒で叩き、その音と感触で品質を確認する打検や、缶積などの作業であった。なかには、アイロン・チンク（鉄の中国人）と呼ばれた大型サケ裁断機も確認できる。ここには、日本人とともにキャナリーで従事していた中国人の存在と、彼らに代わる裁断機の出現と彼らへの蔑視が読みとれよう。サケ缶詰産業の黎明期である19世紀末頃では、サケ缶詰工場の職工は中国人で独占されていた。しかし、アイロン・チンクをはじめとする機械化によって熟練工は少数となり、補助的な作業を担う日本人も雇用されるようになった。また、少数ながら白人とファースト・ネーション（インディアン）も職工として従事していたのである。

表２　缶詰工場での作業

作　業	人数	内　　容	作　業	人数	内　　容
魚選別	3	２階での魚収集に１人、魚選別に１人、アイロン・チンクへの魚配列に１人	秤量器	2	１器に１人、機械工１人
魚洗浄	7		仮巻締機	2	１器に１人、機械工１人
空缶送り	2		缶取り	4	１列に２人
空缶・塩運搬	2	２階倉庫より空缶を運搬、缶送り機へ供給空箱を倉庫に積置き、食塩供給機へ塩を供給	釜入れ	2	別途、釜機械工２人
アイロン・チンク	4	１台に４人	釜出し	2	
断肉機	2	缶詰１列に対し１人	缶の洗浄・倉庫への運搬	5	別途、釜洗浄機械工１人
細切魚送り	1		倉庫内	15	打検、缶積置、ニス塗り、ラベル貼付、荷造り
肉詰機	4	機械１台に２人、別途に機械工１人	火夫	1	ボイラー室
缶直し	2	１列に１人	機関室	1	機械工１人

宮田彌治郎「北米太平洋沿岸鮭缶詰業の趨勢（１）～（３）」、1920 年、453-455 頁より作成

職工は、春から秋にかけて６ヶ月の全漁期に雇用される「シーズン・ボーイ」と、漁繁期の１～３ヶ月だけ働く「ギャランティー・ボーイ」とに大別される。いずれも彼らは、労働者請負業者を経てサケ缶詰会社に雇用される。その雇用形態も２種類からなり、第１は「ケース・カンラクト」と称し、漁期に先立って缶詰製造機械１列に対する製造高を定め、その労働賃金の割合によって契約するものである。不漁の場合でも、請負業者には契約製造高に対する賃金が支払われ、豊漁で契約以上の製造があった際には安価な対価が支払われる。第２は、作業に必要な職工を世話する「ボーイ・カントラクト」である。これは、職工の給料をはじめとする一切の費用は会社支払いで、請負業者は募集・賄請負から利益を得る。

漁期になると、請負業者はまず「シーズン・ボーイ」を募り、漁繁期に「ギャランティー・ボーイ」を送る。さらに豊漁の場合には、工場付近のファースト・ネーションを雇い入れる。つまり、請負業者は漁業の状況に応じて職工を配分し、最低限の人員によって最高の生産高を産出するよう工夫している。

なお、職工の就業時間は６時より 18 時までであった。当時、アメリカでは８時間労働制が採られていた。ただし、漁業の生業上それは不規則となり、不漁の場合には作業も滞る。そこで、１日の平均労働時が８時間以下になるように調整されていたのである。

５．おわりに

本稿では日記類と報告書の活用から、カナダ西岸のフレーザー川におけるサケ刺網漁業の漁場利用を明らかにした。最後に『山宣日記』をもう少し紹介し、今後の課題を提示したい。

> 小生は罐詰会社の日雇人足をやめ、友人某の経営に係る塩鮭業の手伝致居り候。（略）大概はギャソリンボートに乗込み河上に漕廻り漁船より鮭買入れ方を致し居り候。（略）少し柄になき野心ながら晩香坡へ生魚積出しを計画し前週より奔走致し候処、計画によれば十五仙にて当地にて買入れし鮭を晩市氷詰会社に二十五仙にて渡し十仙の口銭にて、一往復一日の利益千尾を以て百弗を得るといふうまいうまい勘定の処、他の連中もどしもどし詰掛け供給過多の結果二十仙に下げられ損こそせざれ

予期程の好結果を得ず候ひき。十弗宛の純益見たきものと思ひ候へ共何しろ始めての商売、損はせぬ丈位の事と存居候。資本は友人の供給にて彼は鰊（ヘリン）及び塩鮭製造を中々手広く営み居り、他に数隻のギャソリン船にて現に生鮭仲買をやり、此秋にも中々儲けたる様子に御座候。（後略）

この冒頭の記述からは、先述した『無名の勇士』に記された場面と同様、無動力の漁船で漁獲されたサケが動力船に収集される様子がわかる。そして、後半では収集に関わる生業が特化した場合、いわゆる仲買業としての独立への試行が看取できる。つまり、新たな日本人漁業者をめぐる生業の萌芽、そして産業への発展についての検討が必要である。特に塩ニシン製造業については、カナダ日本人漁業史で決して見逃せない産業である。これについては既刊の拙稿[10]、ならびに本書に収められた別稿を参照されたい。

付記

本稿を作成するにあたり、『前川コレクション』の活用をお認め頂いた、故・前川勘蔵氏の長女であり故・前川佐一郎氏の実妹である山口静代様にお礼申しあげます。

参考文献

（1）河原典史「『前川家コレクション』にみる女性と子供たち―カナダ・バンクーバー島の日本人―」『京都民俗』第28号、2011年、111-130頁
（2）山本宣治は、1889（明治22）年5月28日に京都市新京極でアクセリー店を営む山本亀松・多年の一人息子として生まれた。病弱のため神戸第一中学校を中退した彼は、宇治川畔の別荘（後の料理旅館「花やしき浮舟園」）で園芸に親しんだ。1906（明治39）年、大隈重信邸での園芸見習を経て、遠戚にあたる眼科医・石原明之助（京都市出身）の誘いで、1907（明治40）年 5月14日園芸研究のためカナダへ渡った。5年間、ハウスボーイ、園芸やサケ漁業などに従事した後、1911（明治44）年に父の病気のため帰国した。旧制第三高等学校や東京帝国大学で動物学を学んだ後、政治家として活躍したが、1929（昭和4）年3月5日、暗殺された。 佐々木敏二『山本宣治』汐文社、1974年、1-352頁
（3）佐々木敏二・小田切明徳編『山本宣治全集：第6巻―日記・書簡集―』汐文社、1977年、1-561頁
（4）河原典史「カナダバンクーバー島西岸への日本人漁業者の二次移住―クレヨコット・トフィーノ・バムフィールドを中心に―」米山裕・河原典史編『日系人の経験と国際移動―在外日本人・移民の近現代史』人文書院、2007年、147-171頁
（5）『前川家コレクション』の一部については、著者の編集により、以下の出版が予定されている。河原典史編『カナダ日本人移民の見た風景―前川家「古写真」コレクション―』三人社、2013年（印刷中）
（6）前掲（2）
（7）佐々木敏二『日本人カナダ移民史』不二出版、1999年、1-302頁
新保満『カナダ日本人移民物語』築地書館、1986年、1-330頁
新保満『カナダ移民排斥史―日本の漁業移民―（新装版）』未来社、1996年、1-214頁
山田千香子『日系カナダ社会の文化変容』御茶ノ水書房、2000年、1-326頁
（8）河原典史「Returns（報告書）とDebits（個人別帳簿）にみるサケ缶詰産業と日本人漁業者」『言語文化研究』20巻4号、2009年、81-86頁
（9）宮田彌治郎「北米太平洋沿岸鮭缶詰業の趨勢（1）～（3）」、1920年、9-13・5-9・3-7頁
（10）河原典史「太平洋をめぐるニシンと日本人―第2次大戦以前におけるカナダ西岸の日本人と塩ニシン製造業―」『立命館言語文化研究』21巻4号、2010年、21-38頁